

江戸時代長崎香焼島で活躍した

櫛ヶ浜の住人

会員 小嶋 利 太

はじめに

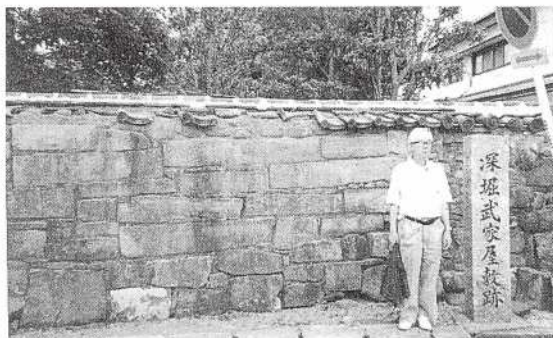
平成八年九月、本会例会において発表した香焼島における村井氏、松田氏（笠戸屋）に関する調査報告をもとに、櫛ヶ浜人の活躍を、史的資料をもとに考察を行った。

一、香焼島の位置と歴史について

香焼島は、古くから南蛮貿易で栄えた長崎港の入口に位置し、長崎の中心部まで一三キロメートルという近距離にあり、気候温暖で、豊かな緑に恵まれた面積五平方キロメートルの島である。現在は、埋め立てられて陸続きとなっている。

香焼という地名は、

弘法大師の因縁によると伝えられ、大師帰朝の途次この地に立ち寄り、航海の無事を感じて護摩密法の修法を行ったとされている。その時の香気が岩窟内に沁み透ったので、この山を香焼山と称するようになり、ここか



深堀武家屋敷跡

ら香焼島の名が生じたといわれる。

古い時代の領有関係は明確でないが、建長七年、承久の乱の戦功により深堀氏が、香焼島の地頭職となったので、領主の名をとって深堀と呼ばれるようになった。江戸時代は、佐賀藩鍋島氏の支藩深堀氏の所領であった。

明治五年の廃藩置県により深堀村となり、明治三一年に分離独立して香焼村となった。そして、昭和三六年、町制施行により香焼町となり現在に至っている。

二、長崎方面で活躍した櫛ヶ浜の人々について

(1) 鰻網業の先駆

安永年間、村井喜右衛門等が来島し、栗ノ浦を主漁場として鰻網業を行ったのが漁網の最初であり、香焼村誌にも、「村井喜右衛門・亀次郎等移住し、鰻網業を営み、之れ漁網の起源たり」とある。そして、「寛政一〇年には、鰻網業を奨励したので、防州より続々と来住する者あり」と述べられ、櫛ヶ浜より多くの漁

民が栗ノ浦に移住したことを物語っている。

(2) 先駆者たちの墓石

① 栗ノ浦墓地の墓石

栗ノ浦の墓地に防州櫛ヶ浜の住民の墓石がり、そのうち最も古いものは、「寛政三亥四月」の刻銘があつて、無名、地藏造りで立派な花崗岩製の分厚いものである。香焼には、この時代の種類のものとしては、他には見られない。石は、徳山御影であり、防州で作製された物を、鰻網業の船で運び、亡き同僚のために建立したものと考えられる。この地藏の横に刻銘のない地藏が一基、その上に防州櫛ヶ浜の住人「笠戸屋久平衛・享和二戌三月五日」の刻銘のある花崗岩製の一基がある。

② 唐ノ船墓地の墓石

「積功軒徳峯有隣信士 笠戸屋徳兵衛

天明七年未二月

と刻銘のある大型墓石がある。「この時代の法名に軒



笠戸屋徳兵衛墓

功徳を積んだ人望に高い人物であったことが法名より窺える。

③ 深堀町内円城寺墓地の墓石

「瑞雲院瑩巖浄光居士 防州櫛ヶ浜人」

と刻銘のある村井喜右衛門の弟音右衛門の花崗岩製大型墓石がある。

④ 浦上墓地の墓石

「徳勝軒徹心如堅居士」

鶴室寿貞大姉

と刻銘のある村井亀次郎夫婦の墓石がある。

号のつけ

られたも

のは、町

内にはみ

あたなら

い」と村

誌にあり、

(3) 寺社等への数々の寄進・寄贈

香焼に移住し活躍した櫛ヶ浜の先人たちは、当地区にも大きく貢献してきていることが、寺社などへの寄進・寄贈から知ることができる。その主なものを上げれば、次の通りである。

。深堀神社の石灯籠

寛政一〇年 寄進 村井喜右衛門・亀次郎

。円福寺の石灯籠

文化四年 寄進 長門屋庄右衛門

。堀池神社鳥居

文政元年 寄進 笠戸屋庄右衛門

。岩崎鼻石灯籠

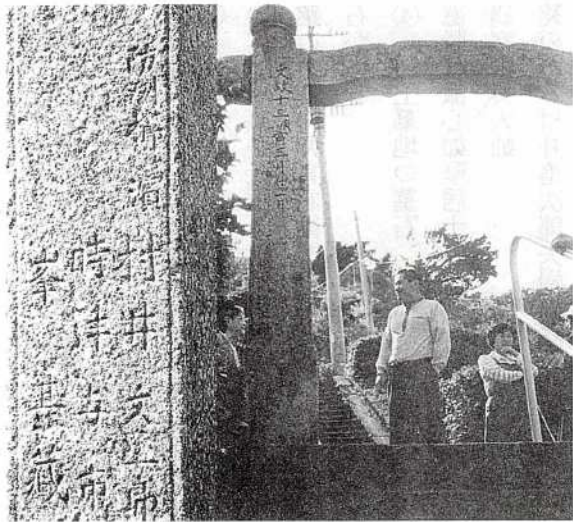
文政一三年 寄贈 村井亀次郎

。円福寺石門

文政一三年 寄進 松田政太郎・村井□□郎

時津 与市・峯 甚蔵

松野□左衛門・時津源□□



円福寺石門

三、香焼島の造船と石炭

(1) 造船について

寛政一一年の『阿蘭蛇船造船辨 村井喜右衛門漁場付海上風景図』に、香焼島で喜右衛門漁場に造船の行われている模様が記載されている。

櫛ヶ浜には、秀吉の時代、浜で造船修理の行われた

記録があり、昭和の中期まで松田造船所（笠戸屋）が盛大に事業を行っている。この松田家の先祖は、村井家の船団と共に香焼島に進出し、造船業を大々的に行い地区の発展に寄与している。このことは、前述したように現地に残る灯笼などの石造物より窺うことができる。また、領主より産業開発の功労を認められて、名字帯刀を許された一族も現存している。

昭和に入り川南造船・三菱造船の世界最大の百万トンドックへと地区は大きく発展するようになるが、その基盤は、こうした櫛ヶ浜出身の先人たちが築いてきたものにはかならない。

(2) 石炭の採掘による櫛ヶ浜製塩業の発達

栗ノ浦では、石炭の露頭が見られ、農民による勝手掘りが認められていたようであり、正徳五年の「農民の石炭勝手掘り」記録が残っている。

香焼島で漁期を終えた櫛ヶ浜の船団は、栗ノ浦の石炭を勝手掘りして帰国している。

当時、櫛ヶ浜地内で一番困っていたのは、燃料であり、特に、製塩は大量の燃料を要するため、製塩など不可能と思われていた。こうした期に、石炭という新燃料を持ち帰った。

これによって、海水の入る悪い水田を塩田として活用することができるようになった。

「櫛ヶ浜の塩はよくない」と、悪口を言われながらも、大量の塩を製造することができて、宍戸家の財政を潤すこととなる。

栗ノ浦の石炭も、当初は、露天掘りであったが、だんだんと山腹を掘り進む方法に変わっている。現在、「狸穴掘り」の跡を残している。これには、高度の技術を要し、落盤から人命を守る安全確保が必要であった。

幸い宍戸家は、大森銀山などで使用した技術者を抱えている欽明寺武田家と姻戚関係にあった。また、領地も隣接し、家臣団の交際も頻繁に行われていて、技術者の招聘には事欠かぬようであった。

四、密貿易取締役人の屋敷内にあった長州屋敷

徳川幕府は、天領長崎を唯一の対外貿易港として、貿易の利による財政基盤の確立をはかった。

長崎奉行には直参旗本が、これに当てられ、一人平均四年の任務であったが、他の相奉行と一年交替で江戸と長崎の勤務が命ぜられた。そのため、新任の奉行は、任務の内容が分からず、「霧に取り巻かれている様」とオランダ商館の日記に評されているように、よく分からぬまま任期切れとなったようである。

幕府は、対外政策実施のための通訳、経済官僚、取締り地役人が必要となり、長崎奉行の補佐役として

唐船阿蘭蛇商吟味定役

異国商売吟味定役

御運上銀納方役

を、町年寄から任じた。

この内には、長崎代官を世襲する家もあり、「町年寄の宅前を通るに大名の如し」と記された日記も見られる。末次興善は、江戸時代より今も「興善町」の名

が残る程の実力代官であった。この末次家の屋敷内に長州屋敷が設けられ、代表者に「聞役」が置かれた。

貿易の独占を図る幕府は、長崎奉行をして来航船に定高仕法を採用し、許可のない船の入港・貿易を許さなかった。

そのため、入港を許されない船を、積戻船といって追放した。しかし、そのまま帰国する船はなく、港外で安い交易が行われ、抜荷・抜買・密買・沖買と呼んだ密貿易が多発した。

そこで、取締り役船が嚴重に見回った。今の巡視船である。一般の船も付近に近づくことは許されず、厳しい摘発をした記録が残っている。

しかし、長崎半島の突端に御崎観音寺があり、長崎商人は観音参りを口実に、公然と密貿易を行ってきている。この観音参りの途中に、香焼島があり、村井家日記に「香焼島にて唐船と反物の交易を行った。」との記事が見える。港外交易は、明らかに密貿易であるが、関係者の記事は見当らない。

取締りの絵

元締の屋敷内に、長州藩聞役が滞在している事実よりして、多くの便宜を得ていたことは間違いない。

おわりに

今回の調査にあたり感じたことは、香焼町の方々と話していると、櫛ヶ浜で話をしているようであり、長崎県に来ていたとは思われなかった。相手の方も同じ



興善町にある長州屋敷跡

で親戚の親父が来て「昔話をしている。」と言った感じで打ち解けた話が出来た。

先回の発表「宍戸家の家紋のある道禄神社」で広島県高田郡の方言・訛が櫛ヶ浜に残っていることを述べましたが、この方言・訛が香焼町にも、現在残っていることでした。この事実は、櫛ヶ浜の住人が香焼島で活躍したことの古文書・古記録に劣らぬ重要な証左といふことができる。

今回の発表により、広島県甲田町、県熊毛町三丘、櫛ヶ浜、長崎県香焼町の四地区の先祖の繋がりを知り得たと、関係者より多くの便りを寄せられた。

願わくば、関係の市町におかれまして、何らかの形で相互連絡ができるようになれば、先祖の霊も喜ばれるのではないかと思われる。

参考文献

- (1)長崎大学教授 文学博士 外山幹夫
著書「中世の九州」「長崎奉行」
「長崎歴史の旅」
- (2)長崎大学専任講師 松竹秀雄
著書「海の長崎学」「稲佐風土記」
「海運経営実体論」「幕末の長崎港」
- (3)長崎療養所長 中西 啓
著書「シーボルト前後」長崎医学史
- (4)郷土史家 森 次郎
「種々の深堀藩研究史料」
- (5)「香焼町勢要覧」 香焼町
- (6)「宍戸記」
- (7)「陰徳太平記」 香川景継
- (8)「甲田町勢要覧」 甲田町